

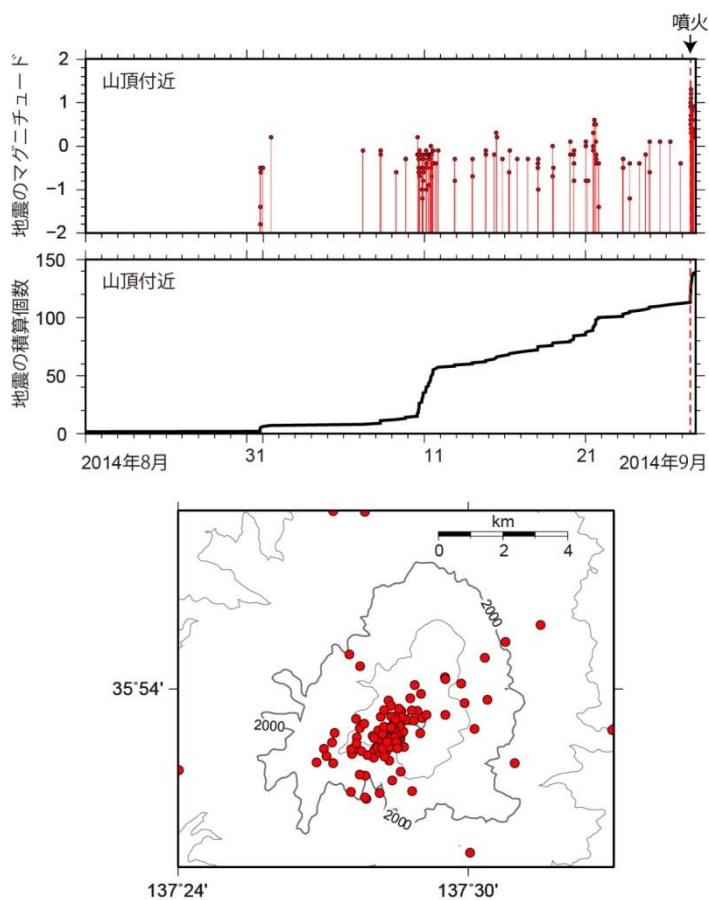
## 御嶽山が噴火しました（27日）

本ニュースレターは解説情報です。9月27日に御嶽山が噴火し、多くの死傷者がでております。この噴火はメディアで報じられているとおり、水蒸気爆発という、地下からマグマが直接上昇してきて噴火したものではありません。現在激しく噴火している小笠原諸島の西之島とは違います。

御嶽火山は通常は名古屋大学が基礎的な観測を実施しています。確かに火山性地震が9月に入ってから増加し、私どもも9月中旬には「御嶽山での活動が活発化している」との情報を入手しました。ただマグマの上昇を示す山体の膨張や火山性微動と呼ばれる連続した振動は噴火のほんの7分前ほどから観測されただけでした。

下の図は名古屋大学のホームページからの情報です。

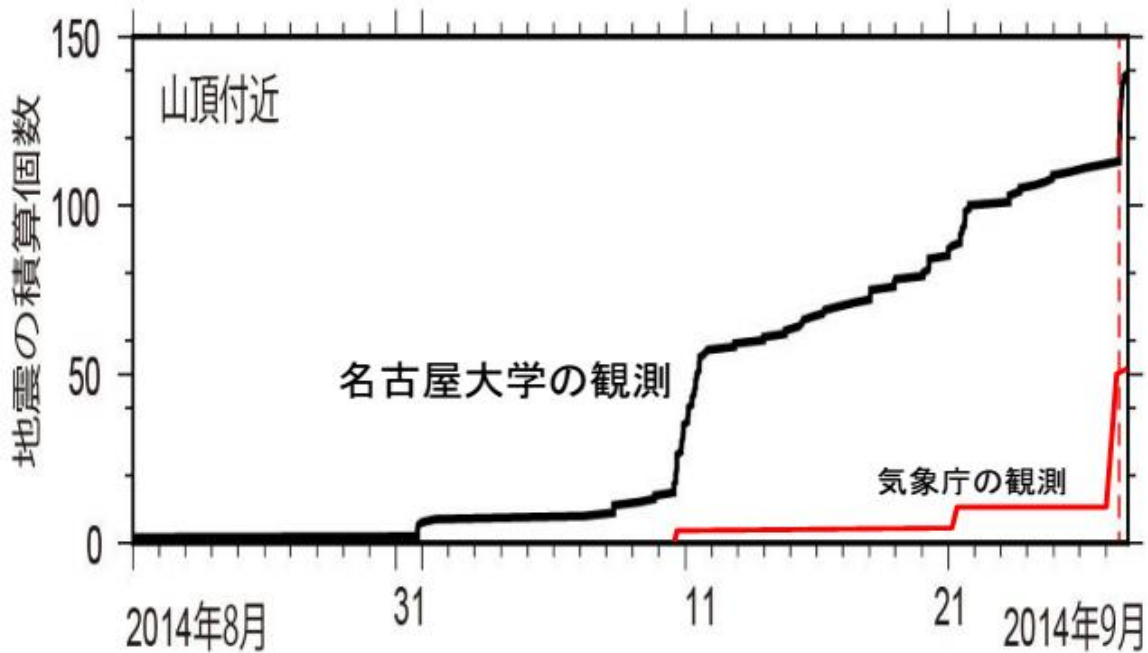
<http://www.seis.nagoya-u.ac.jp/2014090ntake/index.html>



ご覧のように山頂付近では、かなりの微小地震活動が名古屋大学の観測網では検知されていましたが、ところが次ページにお見せするように、気象庁が観測していた地震は名古屋大学が観測した地震の3割ほどだったのです。

今回の噴火は情報をいかに監視し、伝えていくかという事について大きな問題を提起したと考えています。たとえばすべての火山におけるこのような地震活動や地殻変動の情報が最低でも登山者が普通に訪問するサイトで簡単に見れるようなシステムが最低限必要だと思います。また現在は休火山という文類がなくなっている事も啓発していかねばならないと思います。極論すれば火山はすべて活火山なのです。

次に示します図は気象庁と名古屋大学の地震の検知能力の差を示したものです。前のページの名古屋大学のグラフに気象庁が観測した地震を同時にプロットしてみました。やはり「今、地下で起きている事」をきちんと伝えていくシステムが必要だと痛感しています。



ちなみに噴火の前兆と考えられている火山性の微動（連続的な振動）は、確かに直前にしか観測されませんでした。次の図はノートの横線のようなものが2分間です。1時間で30本の記録となります。まさに11時45分（噴火したのは11時52分）ごろまでは顕著な異常ではなかったのです（名古屋大学ホームページの図を改変）。

